

## 私と図書館

# 私のアクティブ・ラーニング

非常勤講師(元教養部教授) 八谷 芳樹



図書館に併設された「ラーニング・コモンズ」が生き生きとしている。議論したり、パソコンを使って発表したりする、学び合いの場が加わったからだろう。図書館のイメージが、静かに読書する場から、会話やコーヒーも楽しめる場が変わった。

ラーニング・コモンズに続いて、名城公園キャンパスがオープンした。AGALS(Aichi Gakuin Active Learning Studio)タワーは、その象徴的存在で、「課題の発見・解決に向けた主体的・協同的な学び」を具現化した設計になっている。ラーニング・コモンズもアクティブ・ラーニングも、ともに学びのパラダイムの転換が背景にある。

「教える授業」から「学ぶ授業」への転換により、学生自らが学ぶ姿勢を積極的に見せるようになった例を紹介する。

「教養セミナー」の授業で、閲覧済みの1年分の新聞から、気に入った書評を原稿用紙に書き取らせ、それに感想を加える作業を課したところ、学生たちは、今までにない積極的な反応を示した。更に、班ごとに模造紙にまとめる課題を与えると、メンバーの下宿に泊まり込んで仕上げる班までが現れたのである。これほどまでに学生に力が入ったのは、「膨大な情報」から「必要な情報」を抜き出し、競ったり力を合わせたりしながら作業を進めるおもしろさと知的好奇心をかき立てたてられたことによるものと思われる。優秀作を「教養セミナー学生論集『知の旅立ち』」に掲載し、模造紙にまとめた作品を図書館に展示して、この授業のテーマ「書評に学ぶ」のアクセントとした。

これを機に、テーマを決めて本を紹介する「ブックトーク」、仲間との対話を通して課題に取り組む「LTD」、推薦本紹介の後、聴衆が読みたくなった本を投票で決める「ビブリオバトル」を、授業や教職研究会の合宿に取り入れた。更に、リラックスした雰囲気の中で主体性と創造性を高め、話し合う「ワールドカフェ」、新聞記事のスクラップに自分の意見を加え、その出来を競う「スクラップバトル」等の「アクティブ・ラーニング的手法」を積極的に試みている。その際、ラーニング・コモンズを活用していることは言うまでもない。

「アクティブ・ラーニング」は、大学だけでなく、小学校から高等学校まで広く話題となり、新しいことのように聞こえるかもしれないが、格別に新しい手法というわけではない。児童・生徒や学生に真の力をつけるための方策なのである。要は、実態をじっくり観察し、そしてさまざまな手法を活用し、一人ひとりを大切に教育を行うことが求められているのである。「学び」も、それを支える「図書館活動」も本来の目的を見失わないことが大切なのである。